

てることになっており、今後の運営上、長期的な努力がもとめられている。

第2に、主に東都生協の運動課題となるのであるが、びんの回収本数をさらに飛躍的に拡大させ（当然それと同時に、びん商品の供給高を高めることも必要である）、同時に、今回新たに製品化した4種類のリユース用統一びんを普及することが重要になっている。

第3には、リユースびんの利用を社会的システムとして普遍性をもったものにしていくことが不可欠で、そのためにも、環境総合負荷測定なども実施したうえで、リユースシステムの科学的優位

性をも明らかにした取り組みが求められている。

その他にも事業の安定化を図っていくうえで、ストックヤードの確保、それと合わせて、地元昭島市のゴミ行政との連携等々、課題は山積状態にある。そうした課題を乗り越えてこそ、今回の事業が成功したといえるわけで、本報告は、センターオープンにあたっての中間的なものにすぎないことを、最後に記して、報告としたい。

第4分科会

女性たちの仕事おこし

歴史を作る「女性たちの仕事おこし」

佐藤 和夫（千葉大学教育学部助教授）

I

インドに行く機会があって、ユニセフの集会で知り合ったブレマ・プラヴという女性の活動家に会った。ボンベイに住む彼女のオフィスを尋ねるまでに見たインドの女性たちの地位はまったく気分が沈んでしまうほどのものであった。男と女は完全に分離され（それでもデリーやボンベイのような大都市の中心部は日本と変わらないけれど）、結婚した男女以外が町の中を歩くことさえも強く禁止されている。何よりショックだったのは、インド中央部のジャイプールという町を旅行したときだった。通りから見る女性たちは、誰でも目が向くほどの鮮やかなサリーを着ているのだけれど、彼女たちは一様に顔を上げることさえせず、下を向いたままに絶望したように歩いている。少なくとも、彼女たちが屈託のない笑い声の中で仲間と一緒に歩いている姿を見ることはなかった。

インドでは夫が死ねば一緒に殺されたとか、持参金が少ないという理由で夫から焼き殺されもす

るという話を聞いていた中でこんな状況を見れば、インドの女性はどれほど厳しい生活をしていることかと気が重くなった。実際、地域によって極端なほどに違いがあるとはいえ、女性が人間扱いされていない状況に決定的な地域差があるとは思われなかった。

ところが、ボンベイの彼女のオフィスを尋ねたときに、今までとはまったく異なる女性たちの姿に出会い、何だろうと不思議に思った。そこに集まっている女性たちはけっして経済的条件という意味で生活に余裕があるようには思えなかったが、みんなとても解放された表情をしていた。何よりも心のゆとりと笑いがあった。それが彼女の組織している活動と関係があると分かったのはまもなくのことだった。

II

ブレマさんがしている活動とは、夫と死別や離別した女性たちの組織なのだという。インドでは、死別離別などをした女性の地位はとりわけて悲惨

なものだという。なぜなら、公的な社会から完全に排除された女性たちにとってみれば、もはやまともな条件で働ける可能性はほとんどないといってもよく、多くの場合、物乞いをするか、さもなければ死を覚悟しなければならないのだという。その悲惨な状況を目にしてきたプレマさんは、約20年前から一つの運動を始めた。それは、こうして別れ、しかも教育を受けていないために文字を読むこともできずに路頭に迷ってしまうような女性たちを集めて、彼女たちに生きていくための教育を与え、仕事をするための訓練の機会をつくっているのだという。

実は彼女のやっていることの中心は、そこから先のことである。そうして訓練を受けたとしても、女性のほとんどにとっては問題が解決しない。まず、誰かが生活できるような値段で雇ってくれるということは考えにくい。ましてや自分で事業を始めようにも、誰も資金を貸してくれるわけではないし、もし借りられたとしても、年率数百パーセントの高利貸しばかりだ。そこで、プレマさんは政府に女性たちが自分で仕事を始められるように、正当な利率で起業資金を貸し付ける機関を作るようにと運動を始めたのだという。つまり、女性のための資金貸付銀行の設立の運動を始めたのだ。

もちろん、この営みには非常に多くの困難がともなった。自己決定権というものをいっさい剝奪された女性にとっては、自分で仕事をする事には困難が山積みだった。男たちは必死の妨害をするし(実際、プレマさんの身体には男から切りつけられた大きく深い傷跡が二箇所くっきりと残っている)、女性自身子どもを何人産むのかということから始めて自分で自分の人生を決めることのできるということの意味を理解させるのに多くの時間がかかる。だから、こうした運動は女性の生き方を全体として自分たちで決めていく変革の協同運動として取り組まれたという。

そして、約20年経った今日、協同組合運動として取り組まれたこの運動は、ボンベイだけで100万人を組織し、今や政府がこの銀行を政府の活動

として認め、プレマさん自身が政府の代表として運動することになったのだという。この運動はインドの各地域に広がり、私が滞在していた間にも、バンガロールでそのニュースを聞いたし、プレマさんによれば、スーダンやそのほかのアフリカ、南アメリカでも取り組みが始まっているという。

III

いうまでもないが、日本でも女性たちが自分で仕事おこしを始めたのは長い歴史ではない。その上、経済的水準には絶対的な差があるけれど、インドと日本の女性との間にそれほど決定的な違いがあるかといえば、疑問符を投げかけずにはいられない。日本でも、離婚をして子どもを抱えた中年女性が生きていくのは気が重くなるほどむずかしい。せいぜい、パートで低賃金の労働をさせられるのが普通だろうし、女性がお金を借りること自体、日本では容易なことではない。

しかし、日本の女性たちにはインドと違う条件も多い。多くの女性には十分な教育が与えられており、ときには経済条件としては一定の水準にあることも珍しくない。しかも、この日本の男社会は働きすぎ社会だ。男たちの多くは、際限もない利潤追求第一主義の企業社会の中で、人間らしい当然の要求さえ持てないでいる。つまり、自分でやりがいのあるよい仕事をしたいとか、業績主義原理の中で人を蹴飛ばしあうような仕事ではなく仲間と働くことの喜べる仕事をしたいといった願いを持つこと自体をあきらめさせられてしまっていることも珍しくない。

そんな中で日本の社会が全体として大きな歪みをおこしてしまって、殺伐としてきただけでなく、実際に人と人との触れあいやいたわり合いの必要な部分の仕事が採算に合わないという理由で、見捨てられ、犠牲にされてきた。つまり、人間らしさを無視した仕事で社会を支配して、この浪費を強制する商品過剰社会には、人間らしさの欠如が対応しなければならないかのようである。

女性たちの仕事おこしが、本格化しつつある現代とはそんな時代なのだ。一つには、高齢者や障害者、さらには病人といった弱者を見捨てる社会

に対抗して、そこへの思いやりを仕事と結び付ける可能性はないかという追求がさまざまな形で始まっている。また、利潤第一主義に犯された食品産業の中で有害食品が横行する今日、自分たちで顔の見える関係の中でお互いに安心できる食べ物を生産したり消費していくネットワークはないのかという試みがどんどん実現されている。さらには、農業や子育ての中でもそれを組織し合って、新しい仕事を開拓し始めている。

これまで大資本の採算原理だけに支配されがちだった社会の中から、働きがいと生きがいを結合し、新しい仕事と生き方を通じてお互いを支え合い、助け合う可能性が追求され始めた。ことによったら、インドの女性たちの運動のように自治体や政府にも働きかけて、女性たちが新しい生き方と仕事の仕方を創り出すべき時代が始まっているのかも知れない。そんな全国の新しい経験交流の場、新しい時代の創造の場となって欲しい。

第5分科会

子育て・教育の協同と協同組合

輝く青春と協働＝自立への力を育む

—見晴台学園のとりくみ—

田中 良三（見晴台学園学園長・愛知県立大学教授）

私の中の見晴台 鬼頭 歩

私は学習障害児の高校、見晴台学園の専攻科の学生です。良い先生に恵まれ楽しい良い学校なのですが、一つ困った事があります。

それは、よそで学校の名前を聞かれた時に無認可できちんとした名前がないので答えにくいという事です。二年前、「見晴台学園です」と答えたら、「そんな学校あったの?」と聞かれ細かく説明して納得させなければならなくなった事がありました。

それで今は、専門学校、看護学校等色々言っていますが、そんなのが続けば私の様な人間でもさすがに良心がうずきます。

言いにくいという理由で学校の名前を外でごまかしたりすれば、本当に学校を愛している事にならないでしょう。しかし周囲の人がみんな何かしらそういう身分証明のような肩書きを持たなければと思います。

皆さんはこれについてどう思いますか。

この文章は、今年の7月2、3日、愛知で開かれた第6回障害者の青年期教育研究全国集会で、

見晴台学園の生徒たちが発表したうちの一つである。彼（女）らは、この集会に学校教師、施設職員、学生、父母たちと共に実行委員として参加した。自分たちの要求を持ち寄って、ディスコ、ボーリング、バーベキュー、ハイキングなどの楽しい企画を立てて取り組んだ。また、全体集会では全国から集まった人々を前に花笠音頭を踊った。

人間関係をとり結ぶことが苦手な学園の生徒たちであるが、いま彼（女）らは、輝き、いろんな人々と目的を一つに集会の中身を創り出し、苦楽を共にする人間らしい協働＝自立への力を育みつつある。

高校へ行きたい、友だちがほしい

1990年4月、学習障害児親の会「かたつむり」（名古屋）を母体に、「学習障害児の高校教育をもとめる会」を運営主体とする、わが国初めてのLD（学習障害）児のための無認可5年制「高校、見晴台学園が開校した。

それまで、「かたつむり」（1982年10月発足）では、遊びの教室、算数教室、子育て実践報告会などLD児と親の願い・要求に立つ多彩な活動を展